

# 英 語 科

## 一年生に対する指導の工夫

高橋 恵亮 倉田 有邦 宮田 学  
山田 雄一 伊藤 悟由

### 〔 I 〕 総合英語の試み

#### 1. 総合英語の必要性

現在高等学校において、英語の教科書は、読本、作文、文法と3冊に分かれており、実際の授業もそれに合わせて、リーダー、グラマーコンボと2人の教師が別々に教えたり、あるいはリーダー、コンボ、グラマーと3人で教えられたりしている。何か我々はこれか当然であるかのごとく授業を行っているが、英語を教えるのに本当にこのように3分野に分けたほうがよいのだろうかという素朴な疑問をまず持ち、現在の授業形態に考察を加えてみた。

現在のリーダーでは読解力を、コンボでは作文力を、グラマーではこれらの基礎的な力となる文法力を養うという方法は、本当に高等学校のすべてのレベルで効率的なのだろうか。確かに、大学レベルや高等学校の3年というような文法的知識か一通り身につけている段階では、非常に優れた効果をあげるであろう。それでは、高等学校1、2年ではどうだろうか。読本、作文のテキストは、生徒が中学校で学習した知識を使って読解力や表現力を身につけられるというものでなく、未習文法知識に振り回されているのが現状である。教師も結局、リーダー、コンボの授業の中で文法に多くの時間を費やしているのである。そして、その授業が複数の教師により行われている。たとえ教師間の連絡かうまくいったとしても、大きな無駄が存在するのは明らかである。

そこで、我々は、高等学校1、2年で文法を軽視した読解力、表現力をつけさせようとする上滑りの授業の無駄と、複数の教師が英語を教える無駄という2重の無駄を解消するために、総合英語という形で、英語の指導を行うことにした。

#### 2. 総合英語の基本的構想

総合英語を開始するにあたり、以下の4点に基づいて指導を計画した。

##### a. 文法事項の習得を中心に据え体系的に扱う

高等学校1、2年生にとって、読解教材、作文教材は、膨大な量の新出文法事項を含んでおり、読解力、表現力を養うためには、その基礎となる言語知識かま

す存在しなければならないという認識のもとに、高等学校1、2年、特に1年には文法知識の習得を第1の目標として指導を行うことにした。そして効率的な習得を得るためには、新出文法事項の量の莫大さを考慮に入れると、最初から体系的に与え練習量を増やすほうが良いと判断した。具体的には、読解教材、作文教材などすべての教材は、文法項目を中心に構成し、リーダー、コンボ、グラマーを有機的に結びつける、つまり、読解教材、作文教材、音声教材、文法教材でそれぞれ重点的に扱われる文法項目が同じになるようにして、1つの文法事項を重ねて学習させるのである。

##### b. 言語材料は、reproductionまで要求する項目と、recognitionができればよいとする項目を区別する

成績不振者の英語の学習に対する意識として、「何をやったらよいかわからない。」という意見がよく聞かれる。我々はその一因か何となく英語の教科書が3冊あり、漠然といろいろな文法項目が羅列されているが、どれか重要であるか、つまり英作ができる程度まで理解しなければいけないのか、意味が理解できればいいのかということかわからないということにあると考えた。新言語材料を扱う際、教師の側かその2つの区別を意識するのは無論のことであるか、それを何らかの形で生徒に知らせることか重要であり、今回の実践においては、reproductionまで要求する項目についてはその項目を含んだ文章の意味が理解できるようにさせるだけでなく、数多くの作文をさせ、recognitionができればよいとする項目については作文をさせず、英文の理解だけに止めるという区別を設けた。

それでは、高等学校1年におけるreproductionまで要求する項目とは何かと言えば、中学校に扱われた言語材料と、英語を運用するのに重要な役割を果たしている文法項目(動詞の時制、不定詞、分詞、動名詞、助動詞、関係詞、態、語法)の基本的ルールとした。

##### c. 演繹の指導を中心に置き、帰納的指導もとりまぜる

言語の指導において問題となるのは、文法規則に関する知識形成をいつ行うかということである。そこで、しばしば大別されるのは、演繹の指導法と帰納的指導

法の2つである。従来から帰納的指導法が望ましいとされているのであるが、果たして現在の日本における高校英語教育についてもそれが100%正しいと言えるだろうか。高校生の知的発達レベル、日英語間の言語・文化的距離は言うに及ばず、さらに問題となるのは現在の詰め込み式英語カリキュラム、英語教材であろう。1ページに新出表現、新語が続出する現状では、効率的な帰納的指導法は難かしいと考え、むしろ徹底的に演繹的指導法を押し進めたほうが効率的な指導が出せるのではないかという結論に至った。演繹的指導法の欠点とされている言語運用がうまく行われないう点は、演繹的指導法を採用することにより生じる指導の効率化からもたらされる時間を利用した練習量の増化により解消しようとすることにした。とは言っても、言語の学習における推理作用、問題解決的学習は無視できず、この面を補うために比較的易しい教材を使って帰納的指導とまでは行かないにしても、それに近い形で指導を行うことにした。

#### d. 「読む」「書く」だけでなく、音声面も重視する

従来から音声面の充実は強く叫ばれているのであるが、なかなか実現されていないようである。今回の総合英語では、1,2年は文法体系を理解させることを主たる目的としているのであるが、各文法項目の導入の段階では音声面から入ることにした。また、すべての授業を通じて音声面の言語活動の基礎といえる、英語を口に出すということを重視することにした。

### 3. 総合英語の具体的指導

我々は以上4点を考慮に入れて、高等学校1学年3クラスに総合英語による英語の指導を行った。実際の指導は、演繹的指導と帰納的指導という観点から、Aタイプ、Bタイプの2つの授業ユニットを構成し、それらを適宜組み合わせた。

#### a. Aタイプ

Aタイプの授業ユニットは、総合英語の中心を成すものであり、読解、作文、文法を網羅している。我々が指導において中心的に利用する教材として、旺文社から発行されているThe Senior English Readers Book Oneを採用した。この教科書は総合教科書として編纂されたもので、読本と作文が一冊にされたテキストである。各レッスンは、それぞれ本文、作文と文法のとまめにあたるPOINTS FOR WRITING, EXERCISEという構成になっている。文法は一応別の教科書を使用することになっているが、作文は文法項目で分類されており、必ずしも文法のテキストを使用しなくても文法を指導できるようになっている。とは言っても、文法に関しては不十分であり、自作のプリントを使い文法を指導した。年間の指導計画

としては、The Senior English Readersの文法項目の順に従うことにした。また、これだけでは音声面が不十分であり、音声面を主として扱うテキストとして、Oxford University Pressから発行されているJunior Listen and Speakを使用した。

さて、以下が具体的なAタイプの授業ユニットの指導手順だが、細かく手順を追うことにしよう。

#### 各ユニット指導手順

- |         |                                 |      |
|---------|---------------------------------|------|
| I 導入    | Junior Listen and Speak         | 1    |
|         | —音声面の指導                         |      |
| II 展開-1 | 自作文法プリント                        | 3    |
|         | —文法・作文の指導                       |      |
|         | 展開-2 The Senior English Readers |      |
|         | (本文)                            | 7~10 |
|         | —読解の指導                          |      |
| III 整理  | The Senior English Readers      | 3    |
|         | (POINTS FOR WRITING)            |      |
|         | (EXERCISE)                      |      |
|         | —作文・文法の指導                       |      |

注：最後の数字はそれぞれ要する単位時間

#### I 導入 (音声面の指導を中心に行う。)

導入とは、各ユニットにおいて中心的に扱う文法項目について、中学校における既習事項の復習と確認をし、IIの展開への橋渡しとなる段階である。具体的には、その文法項目を不定詞とするなら、不定詞に関係する単元をJunior Listen and Speakの中から選び、聴解練習をするとともに、不定詞の既習文法事項のオーラル・プラクティスを行う。

#### II 展開-1 (文法・作文、特に文法の指導を行う。)

Iの導入で一部だけ断片的に与えられた文法項目を、この段階では不定詞なら不定詞全体に展開するのである。自作のプリントにより、サブノート形式で口頭英作から始め最後にはプリントを埋めてゆくという手順により、運用性の高い項目を中心に不定詞の全体を体系的に理解させる。そして、このパートが終了した時に、整理された基本的知識を確認する問題をプリントし生徒に渡し家庭学習させる。(資料参照)

#### 展開-2 (読解の指導を中心に行う。)

I, 及びII-1の段階を経て新しく学習された文法項目の知識を、The Senior English Readersの本文を読むことによって実際の文脈の中で確認しつつ、本文の深い読解をするというのがこの展開-2である。しかし本文を読む場合、主要な文法項目以外にも新表現が多く登場しそれをどのように取り扱ってゆくかが問題となった。このAタイプの授業ユニットは演繹的指導が中心であり、本文に登場するその他の新文法項

目も本文を読みながら理解させるのではなく、本文の読解の前に前以って理解させてしまい、本文の読解をする時にはできる限り言語材料面でのつまづきを取り去ることにした。このようにすることにより、文法項目の定着度を高めることができ、一方では内容を理解しつつ途中で言語材料へというような、話の流れを止めてしまうことが避けられ深い読解も可能となるのである。

具体的には、単位時間の前半には言語材料を、後半には内容読解をというように、1単位時間を2つに分けてしまうのである。以下に、標準的な授業手順を示そう。

標準的な授業手順

- A Review (expressions)
  - Oral Practice
- B Presentation (expressions)
  - 1 Explanation
  - 2 Practice
- C Review (context)
  - 1 Tape-Listening
  - 2 Question-Answering
- D Presentation (context)
  - 1 Tape-Listening
  - 2 Reading
  - 3 Question-Answering
  - 4 Comprehension
- E Consolidation (context)
  - 1 Tape-Listening
  - 2 Question-Answering

Ⅲ 整理 (作文・文法の指導を中心に行う)

I、Ⅱの段階を通じ、文法と読解はそれぞれ集中的に、かと言ってバラバラでなく有機的なつながりをもって学習されたのであるが、作文という面は文法の習得の手段として行なわれたのであり、無味乾燥なつまらない短文ばかりであった。そこでこのパートでは、The Senior English Readersの各レッスンの最後のPOINTS FOR WRITINGを利用して、新しい文法項目の整理を行い、もう一度その確認をしたうえで、EXERCISEにより表現力の指導を行うのである。

以上I～Ⅲまでの流れを基本として、時間の都合で一部を省略した場合もあったが、以下のように年間8ユニットを行った。また主要な文法項目のうち、助動詞は指導ができず2年に回すことにした。

- 1学期 ユニット1 文型
  - ユニット2 時制
- 2学期 ユニット3 不定詞、態

- ユニット4 関係詞
- ユニット5 分詞、仮定法過去
- ユニット6 動名詞
- 3学期 ユニット7 仮定法過去完了
- ユニット8 話法

b. Bタイプ

Bタイプの授業ユニットは、Reader's Digest社から発行されているReader's Digest Readings・Book Oneを使って問題解決型学習をさせるものであり、Aタイプの授業ユニットとは異なり、文法力よりは読解力、速読力と深い読みの両面の育成を目的としている。この1ユニットは3単位時間から成り、まず最初の1単位時間を使って本文を読ませExerciseをやらせて、速読の練習を行う。そして残りの2単位時間に、深い読解と新出表現の説明、練習を行うのである。

このBタイプの授業ユニットは、Aタイプのユニット間に年間5回行った。

4. 評価とまとめ

このように総合英語を1年間行ってきたのであるが、その評価を下すために生徒に簡単な意識調査を1学年終了時に行った。

今年1年、リーダー、コンボ、グラマーと分けなくて総合英語として英語を行ってきました。そのことをどう思いますか。

大変よかった まあまあよかった よくなかった  
18人(14.6%) 73人(59.3%) 32人(26.0%)

これがその結果であるが、今までリーダー、コンボ、グラマーというように3つに分けて英語の指導を受けたことがない生徒に、このような質問をするのが果たして妥当であろうかという疑問が残るが、その結果は全般的には好評のようである。さらに分析するために、この意識調査には、自分が選んだものにコメントをつけさせたが、そのコメントはだいたい次の4つに分類できた。総合英語の長所ばかり指摘していたもの(+)  
短所ばかりのもの(-)、長所・短所それぞれ述べていたもの(±)、総合英語という観点からは述べていなかったもの(0)の4つである。以下がそれぞれ占める割合である。

(+) (±) (-) (0)  
46人(37.4%) 23人(18.7%) 34人(27.6%) 20人(16.3%)

この結果からも大体好評のようだ。(+)の意見を持ったもののなかでは、「総合英語でやったほうが、いろ

いろいろなことが重ねて関連してスムーズに学習できる。」  
 というような意見が多く(46人中29人)、その他「リ  
 ーダー、コンポ、グラマーを単独でやるとつまらなく  
 なるのではないかと思う」とか、「中学との授業の差  
 があまりなくて勉強しやすい」という意見も比較的  
 多かった。この結果から、我々は総合英語の意義に自信  
 をつけ、さらに工夫によって中高英語のギャップの解  
 消に役立つという可能性も見出すことができた。

しかし、一方では今回の総合英語の実践においては、  
 多くの欠点が指摘され反省をさせられる点が多かった。

**a. 家庭での学習がやりにくい**

前の意識調査において、(一)の意見を述べていたも  
 のの中では、「グラマーを理解する前にリーダーにな  
 ったりというように、頭が困乱し勉強がやりにくい」  
 という意見が多く見られ(34人中16人)、また(土)の  
 意見を述べたものの中にも、「関連性があってよいが、  
 ごちゃごちゃな感じで勉強しにくい」という意見が見  
 られた(23人中8人)。程度の差こそあれ大部分の生  
 徒は勉強がやりにくいと感じているという結論を出す  
 のは少し尚早かもしれないが、「3つの分野のうちど  
 れか1つからできるようにしていこうと思うのに、そ  
 れがぶち壊された」という意見が見られたように、成  
 績が下位の生徒には総合英語というだけで精神的にあ  
 るいは実質的に負担となっていたような節もみられる。  
 これが高等学校1年レベルにおける総合英語の内在的  
 な欠点であるかどうかはわからないが、今回の実践に  
 関しては、教材が多く(文法のプリントも含めれば4  
 種類になる)、しかもその教材もそれぞれピクアップ  
 して授業を行ったことや、さらにいろいろなタイプの  
 授業があり授業の流れがつかみにくかったことなど  
 が、一層勉強のしにくさをもたらしたようだ。

**b. 4技能のバランスが崩れた**

この点に関しても意識調査を行った。

リーダー的要素、コンポ的要素、グラマー的要素の  
 中で不足していたと思われるものがありましたか。あ  
 ればいくつでもいいから○をうちなさい。

R的要素 C的要素 G的要素 なし  
 29人(23.4%) 59人(47.6%) 33人(26.6%) 31人(25%) / 124人

上の3要素の中で必要以上であったと思われるもの  
 がありましたか。あればいくつでもいいから○をうち  
 なさい。

R的要素 C的要素 G的要素 なし  
 4人(3.3%) 4人(3.3%) 8人(6.6%) 102人(83.6%) / 122人

「読む」「書く」「聞く」「話す」という4技能の  
 中で不足していたと思われるものがありましたか。あ  
 ればいくつでもいいから○をうちなさい。

「読む」 「書く」 「聞く」  
 24人(19.4%) 47人(37.9%) 52人(41.9%)  
 「話す」 なし  
 85人(68.5%) 15人(12.1%) / 124人

上の4技能の中で必要以上であったと思われるもの  
 がありましたか。あればいくつでもいいから○をうち  
 なさい。

「読む」 「書く」 「聞く」 「話す」 なし  
 7人(5.6%) 3人(2.4%) 6人(4.8%) 3人(2.4%) 105人(84.7%)  
 / 124人

さて以上の結果を見ると、コンポ的要素と音声的要  
 素の不足を生徒は指摘している。まず、作文という面  
 だが、確かに純粋に作文としての時間は全体から見  
 らば少ないが、文法の修得の段階で多く英文を作って  
 おり作文の時間は十分あったはずである。この結果を  
 もたらしたのは、生徒は教科書の作文しか考慮に入れ  
 なかった結果であると思われる。しかし、問題なのは「聞  
 く」「話す」といった音声面の指導が少なかったとい  
 う指摘である。我々授業の進度が遅れるとどうしても  
 音声面に齟齬せがいてしまうのは常であって、今回  
 の総合英語の実践中にもこのようなことが多々あった  
 結果がこの反応に現われていると思われる。それ以上  
 に今回の総合英語の音声面の指導の本質的不足は改善  
 の余地が多いにある。

**c. 中高英語のギャップの解消に役立たなかった**

今回の総合英語の実践において、もしそれがうまく  
 行われたなら、特に中高のつながりを意識しなくとも  
 中高英語のギャップの解消に役立つであろうという予  
 測を立てたのだが、一部には前にあげたように中高の  
 差を感じなかったという意見もあったが、全般的には  
 あまり好ましい結果を得ることはできず、積極的な中  
 高のつながりに対する取り組みの必要性を感じさせられた。

一学期において、中学時代の英語と比較して異和感  
 を感じましたか。

大変感じた 少し感じた 全然なかった  
 51人(40.5%) 56人(44.4%) 19人(15.1%)

以上のように、1年間総合英語の実践を行ってきて、  
 残念ながら生徒の意識調査の結果からだけしか判断で  
 きないが、おおむね好結果を得られた。しかし、今回  
 の総合英語の指導は1つの試みにしか過ぎず、我々の  
 指導が基づいている、現状の高校英語教育においては  
 帰納的指導法より演繹的指導法が有効であるという仮  
 定と、同じく1,2年においては文法項目を体系的に扱  
 い英語指導の中心に置いたほうが効率的であるという  
 仮定の是非を示すものでなく、実証的な研究の必要性  
 が感じられた。  
 (伊藤 悟由)

資料

LESSON 6 THE SILVER ELEPHANT

GRAMMAR

A 不定詞の基本的用法

a 名詞的用法

(To watch stars is interesting.)

→ (It is interesting to watch stars.)

(It was easy for him to understand the book.)

(She wants to go with us.)

b 形容詞的用法

(Give me something to drink.)

(I have no friend to help me.)

\*前置詞が必要な場合

He has no house to live in.

cf. live in a house

(There was no chair to sit on.)

(Lend me something to write with.)

c 副詞的用法

1 目的

(He goes to the library to study English.)

(Mary got up early to catch the first train.)

2 原因

(I'm glad to see you.)

(She was very sad to hear the news.)

3 理由

He must be crazy to do so.

4 結果

He lived to be eighty.

His son grew up to be a musician.

5 形・副を修飾する場合

English is difficult to master.

(This water is good to drink.)

(The song is difficult to sing.)

(The river is dangerous to swim in.)

その他不定詞を使った表現

1 ask + o + to 不定詞

tell

want

invite

expect

(I asked my friend to help me.)

(We expect you to do your best.)

2 疑問詞 + to 不定詞

(I don't know how to swim.)

(Please tell me when to start.)

※ かつこ部分は生徒に書き入れさせる。以下省略